福岡市埋蔵文化財調査報告書第848集

博多102

―博多遺跡群第142次調査の概要―

2005

福岡市教育委員会

博多102

―博多遺跡群第142次調査の概要―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第848集

2005

福岡市教育委員会

（明治33年　陸地測量部測図）

序　文

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との玄関口として発展し、市内には豊かな自然と多くの遺跡が残されています。これらは私たちの暮らしに潤いを与え、豊かな生活環境を作り出しています。私たちはこれらの遺跡を後世に伝えていくことを願い、さまざまな形で遺跡の保護・活用に取り組んでいます。

その一方で、最近の都市の発展により新しい開発事業が数多く手がけられ、そのために重要な遺跡が破壊され、失われつつあるという厳しい現実があります。当教育委員会ではこれらの遺跡については事前に発掘調査を行い、先人の足跡を後世に残せるよう、その記録保存に努めています。

本書は博多区祇園町地内における博多遺跡群第１４２次調査の成果を報告するものです。この調査により、古墳時代から中世にかけての重要な遺構、遺物を確認することができ、この地域での貴重な資料を得ることができました。

本書が文化財保護への理解と協力を得られる一助となるとともに、学術研究の資料として御活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くのご協力を頂いた、株式会社不動産総合センターをはじめとする関係者の方々に対し、心より謝意を表します。

平成 17 年 3 月 31 日

福岡市教育委員会
教育長　植　木　とみ子

例　言

1．本書は共同住宅建設に先立って福岡市教育委員会が平成15年7月28日から平成15年10月24日にかけて行った博多遺跡群第１４２次調査の調査報告書である。

2．本書に掲載した遺構実測図の作成は、大塚紀宣のほか、川辺知子、菊池真希子が行った。

3．本書に掲載した遺物実測図の作成は大塚のほか、野中理加、奈良尚美が行い、井上玲奈、藤島志考の協力を得た。なお、遺物の拓本については、力武卓治（福岡市教育委員会大規模事業等担当課長）の協力を得た。

4．本書に掲載した写真の撮影は大塚が行った。

5．本書に掲載した挿図の整図は大塚が行った。

6．本書で用いた方位は磁北で、真北から6°21′西偏する。

7．本書で用いた座標は国土座標第Ⅱ系を使用している。座標北は真北から0°19′西偏する。

8．本書で使用した遺構の呼称は、井戸・井戸状遺構をSE、土坑をSK、柱穴・ピットをSPと略号化している。

9．遺構・遺物番号は基本的に各々通し番号で、重複はなく、一部欠番が生じる。なお、遺構番号については、調査時に以下のように決定している。

1～150　　第１区（調査区西側）第１面検出遺構

151～200　第２区（調査区東側）・第３区（調査区南東側）第１面検出遺構（SK-172を除く）

201～　　第２面・第３面検出遺構（SK-172を含む）

10. 本書に関わる記録・遺物などの資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。

11. 本書の執筆・編集は大塚が行った。

目　次

第１章　はじめに …… 1
1. 調査に至る経緯 …… 1
2. 発掘調査の組織 …… 1
第２章　調査の記録 …… 2
1. 調査概要 …… 2
2. 各遺構面の概要 …… 3
（1）第１面 …… 3
1）井戸・井戸状遺構 …… 3
2）土坑 …… 15
（2）第２面 …… 25
1）井戸 …… 25
2）土坑 …… 27
（3）第３面 …… 29
1）溝状遺構 …… 29
（4）鉄製品・銅銭 …… 32
1）鉄製品 …… 32
2）銅銭 …… 34
第３章　小結 …… 34

挿図目次

Fig. 1　調査区位置図（1/4000） …… 1
Fig. 2　SE－06 遺構実測図（1/60） …… 2
Fig. 3　SE－06 出土遺物実測図（1/3） …… 2
Fig. 4　遺構配置図（1/200） …… 3
Fig. 5　SE－07 遺構実測図 1（1/60） …… 4
Fig. 6　SE－07 出土遺物実測図 1（1/3） …… 5
Fig. 7　SE－07 出土遺物実測図 2（1/3） …… 6
Fig. 8　SE－07 出土遺物実測図 3（1/3） …… 7
Fig. 9　SE－07 出土遺物実測図 4（1/3・1/4） …… 8
Fig.10　SE－07 出土遺物実測図 5（1/4） …… 9
Fig.11　SE－07 遺構実測図 2（1/60） …… 9
Fig.12　SE－07 出土遺物実測図 6（1/3） …… 10
Fig.13　SE－151・152 遺構実測図（1/60） …… 11
Fig.14　SE－151 出土遺物実測図（1/3） …… 12
Fig.15　SE－152・153 出土遺物実測図（1/3） …… 13
Fig.16　SE－153・159・183 遺構実測図（1/60） …… 14
Fig.17　SE－159 出土遺物実測図（1/3） …… 15
Fig.18　SE－183 出土遺物実測図（1/3） …… 16
Fig.19　SE－186・204・212 遺構実測図（1/60） …… 17

Fig.20 SE－186 出土遺物実測図（1/3） …… 18
Fig.21 SK－01・02・03・05・08・17 遺構実測図（1/40） …… 19
Fig.22 SK－01・02・03・05 出土遺物実測図（1/3） …… 20
Fig.23 SK－08・17・140 出土遺物実測図（1/3） …… 21
Fig.24 SK－154 出土遺物実測図（1/3） …… 21
Fig.25 SK－140・154・155・156・157・161・164・166・168・169・182 遺構実測図（1/40） …… 22
Fig.26 SK－155・156 出土遺物実測図（1/3） …… 23
Fig.27 SK－157・161・164 出土遺物実測図（1/3） …… 24
Fig.28 SK－166・168・169・182 出土遺物実測図（1/3） …… 25
Fig.29 SK－172 遺構実測図（1/40） …… 26
Fig.30 SK－204・212 出土遺物実測図（1/3） …… 26
Fig.31 SK－172 出土遺物実測図 1（1/3） …… 27
Fig.32 SK－172 出土遺物実測図 2（1/3） …… 28
Fig.33 SK－203・206 遺構実測図（1/40） …… 28
Fig.34 SK－203・206 出土遺物実測図 1（1/4） …… 29
Fig.35 SK－203・206 出土遺物実測図 2（1/3） …… 29
Fig.36 SK－213 出土遺物実測図 1（1/3・1/4） …… 30
Fig.37 SK－213 出土遺物実測図 2（1/3） …… 31
Fig.38 SK－213 出土遺物実測図 3（1/3） …… 32
Fig.39 鉄器・銅銭実測図（1/1・1/2・1/4） …… 33

図版目次

図版 1 （1）1 区（調査区西側）第 1 面（東から）
（2）1 区第 2 面（東から）
図版 2 （1）2 区（調査区東側）第 1 面（東から）
（2）2 区第 2 面（東から）
図版 3 （1）3 区第 1 面（北から）
（2）SK－07 井戸枠内遺物出土状況（南から）
（3）SK－07 下層（北西から）
図版 4 （1）SE－151（南から）
（2）SE－153（南から）
（3）SE－153 土層断面（南から）
図版 5 （1）SE－159（西から）
（2）SE－171 土層断面（南から）
（3）SE－204（南から）
図版 6 （1）SE－212（南から）
（2）SK－207（北から）
（3）SK－207 人骨出土状況（北から）
図版 7 （1）SK-203（東から）
（2）SK-203 下部（西から）
（3）SD-213（東から）
図版 8 出土遺物

第1章　はじめに

1. 調査に至る経緯

2003年（平成15年）2月26日付けで、株式会社不動産総合センター　代表取締役三原一征氏より福岡市博多区祇園町583−4地内における共同住宅建設にともなう埋蔵文化財事前審査願が申請された。これをうけて埋蔵文化財課では申請地が周知の遺跡である博多遺跡群の範囲内に位置することおよび、当該地が平成11年2月5日に財務省福岡財務支局の申請による試掘調査の結果、同地内で遺構が遺存していることを確認していたことから、関係者と協議を重ねた結果、敷地ほぼ全体にわたる建物の建築予定部分については建物基礎が遺構面に影響を与えるため敷地全体について発掘調査による記録保存を図ることとし、平成15年7月から10月にかけて発掘調査を実施した。

調査に先行して、建築工事に伴う基礎杭打ち、矢板打込み、表土搬出を行い、その後に調査区の西側部分を先行して調査を開始した。調査は7月28日より9月10日にかけて作業員による遺構検出、遺構掘削を行い、9月11日、12日に重機による廃土反転、9月16日から10月24まで調査区東側部分で人力による遺構検出、遺構掘削を行った。

発掘調査の実施にあたっては、株式会社不動産総合センターをはじめ関係者の方々に多大な御理解と御協力をいただきました。ここに記して感謝いたします。

2. 発掘調査の組織

事業主体　株式会社不動産総合センター
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　埋蔵文化財課　課長　山崎純男（前任）山口譲治（現任）
庶務担当　文化財整備課　御手洗清
事前審査　埋蔵文化財課事前審査係　宮井善朗　中村啓太郎（平成10年度試掘調査時）米倉秀紀
　　久住猛雄（平成15年度調査時）
調査担当　埋蔵文化財課調査第2係　大塚紀宣

Fig.1　調査区位置図（1/4000）

第２章　調査の記録

１．調査概要

調査地点は福岡市博多区祇園町583－4に位置する。調査面積は163.4㎡である。調査は対象範囲を1～3区に分割し、各区毎に上層から下層まで調査を行った。したがって調査は各区毎で完結するような状況になり、各区にまたがる遺構の一部は隣接する区で検出できなかったものもある。なお、以下の報告では区ごとの区別は行わない。

現地の基本層序は、上層から表土、褐色砂質土（造成盛土）、暗褐色砂質土（造成盛土）、暗灰褐色砂質土、褐色砂層、明褐色砂層となる。調査はこのうち暗灰褐色砂質土層上面（第1面）、褐色砂層上面（第2面）明褐色砂層上面（第3面：SD-213）の各面で実施した。

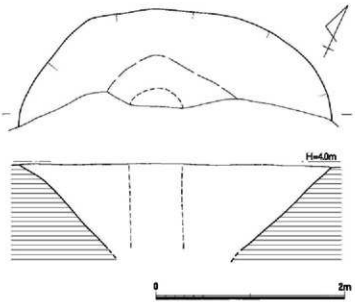


Fig.2　SE－06遺構実測図（1/60）

各遺構面の大略な年代は、第1面が11～13世紀、第2面が古墳時代後期～古代、第3面が古墳時代前期に該当すると考えられる。検出された遺構の一部、特に第2面で検出された遺構のいくつかは、第1面で見落とした遺構であり、同一面での遺構の平行関係が乱れた部分があるが、各遺構の年代は

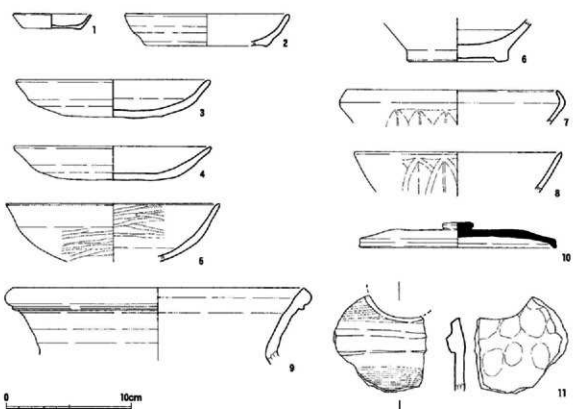


Fig.3　SE－06出土遺物実測図（1/3）

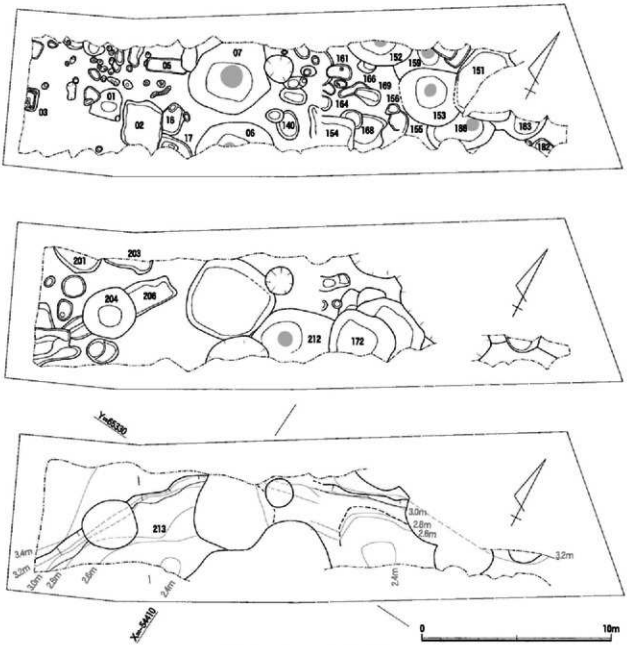


Fig.4　遺構配置図（1/200）

出土遺物により判断できると考えられる。

なお第３面以下まで掘削を行ったが、これ以下では人為的な遺構は認められなかった。

2. 各遺構面の概要

（1）第１面

1）井戸・井戸状遺構

SE-06（Fig.2）調査区西側で検出された井戸で、南側は調査区外に及ぶ。全体形は略円形であろう。断面は擂鉢形で、井戸枠は掘方のほぼ中央付近に位置する。井戸枠材は検出されておらず、木枠であったとみられる。

出土遺物（Fig.3）図示したものはいずれも井戸掘方からの出土。1・2は土師皿で底部は糸切り。3・

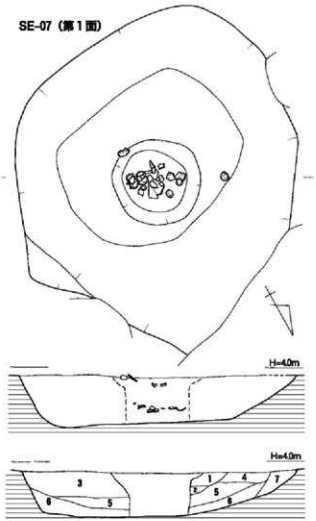


Fig.5　SE－07 遺構実測図（1/60）

4は土師器坏、5は瓦器椀。6は白磁碗底部。破片部分の外面は露胎、内面見込みに沈線を施文する。7は青磁東口碗で8は青磁碗。いずれも外面に鎬連弁文を施文する。9は陶器甕口縁部。胎土は暗赤褐色で内外面とも回転横ナデ。10は須恵器坏蓋。11は円筒埴輪破片で、円形透かし孔がみられる。

出土遺物から見て、13世紀前半の遺構とみられる。

SE-07　調査区西側で検出された遺構。第1面で井戸状の掘り込みと中央の井戸枠状の掘り込みを確認したが、井戸枠が第2面以下で確認できず、掘方の床面が平坦であるなど、井戸と判断するには困難で、さらに第1面と第2面の遺構が別個の可能性も生じた。このため出土遺物は第1面掘方、第一面井戸枠内、下層（第2面以下）と分類して報告する。

第1面で検出した遺構（Fig.5）は、略長方形の掘方の中央に円形の掘り込みが認められる。第1面時点での断面形は皿形で、中央の掘り込みは床面まで下がる。

第2面で検出された掘方（Fig.11）は第1面の掘方より一回り大きく、平面形は略長方形を呈する。断面形は皿状。床面上に井戸枠の痕跡はない。

出土遺物（Fig.6～10・12）第1面掘方からは多数の遺物がまとまって出土する。12～27は土師器皿。全て底部は篦切りで、板状痕を残す。24は体部外面と内面見込みにミガキを施す。28～44は土師器坏。いずれも底部はヘラ削り、体部は横ナデ。45～53は土師器椀。48～51・53は内外面とも黒色、52は内面黒色の椀。54は瓦器椀。内外面とも薄灰色を呈し、硬質。

55～61は白磁碗。55はやや小さめの玉縁口縁で丸い胴部、56～58は大きめの玉縁に直線的な体部をもつ。59・60は体部外面に縦篦花弁文を片彫りで施文する。62・63は白磁皿。内面見込みに段をもつ。64は天目碗。釉色は黒褐色、胎土色は薄灰色。65は青磁水注の頸部片で、深緑色の厚い釉を施す。66は青磁壺。外面上半～頸部内面にかけて青灰色の釉が施され、外面肩部に砂目が残る。67は四耳壺。外面上半に緑色の釉がかかる。68・69は褐釉壺。69は二次被熱を受ける。70は四耳壺上部で、外面に白色の釉が残る。

71は陶器壺。胎土は暗灰色で、頸部外面に沈線で重弧文を3条施文し、体部は格子目タタキを施す。高麗陶器とみられる。72は陶器壺又は甕。胎土は須恵質で、胴部外面に横方向平行タタキが残る。73は陶器壺底部。無釉で胎土は薄灰色の須恵質である。74～75は瓦。74は軒丸瓦で、草花文を型押しする。75・76は軒平瓦で、いずれも内面には布目痕、外面には斜格子文タタキ痕が残る。

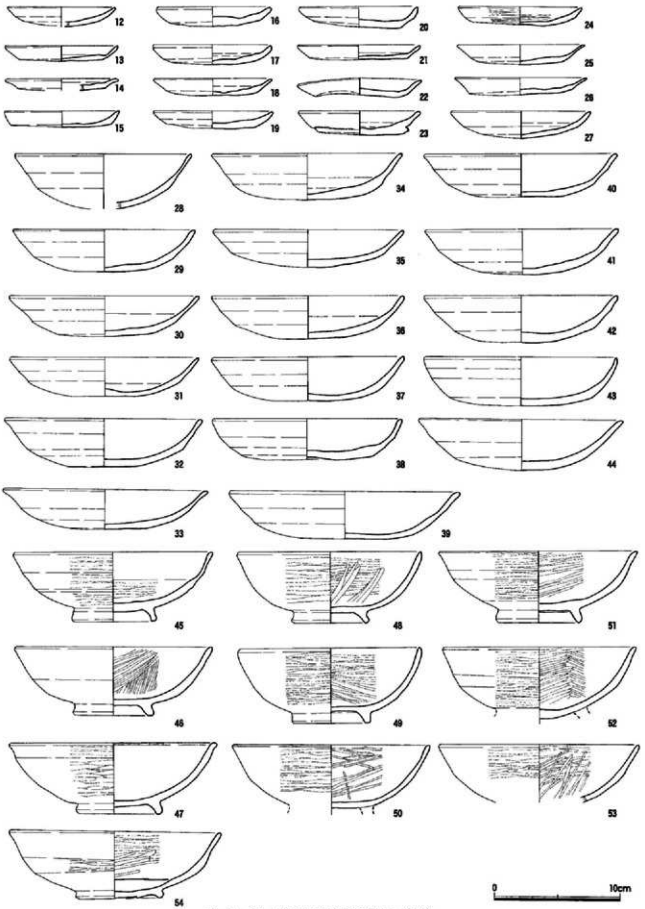


Fig.6　SE－07 出土遺物実測図 1（1/3）

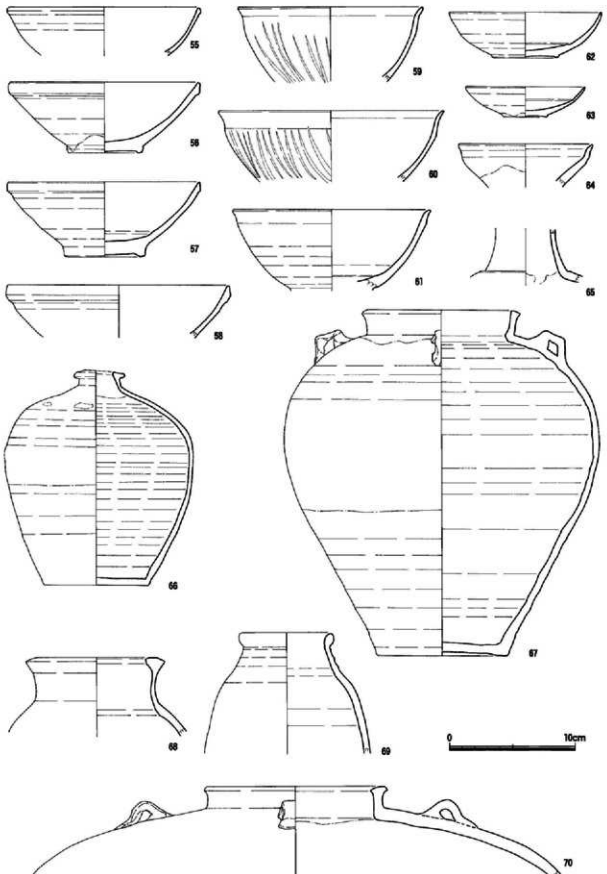


Fig.7　SE－07 出土遺物実測図 2 (1/3)

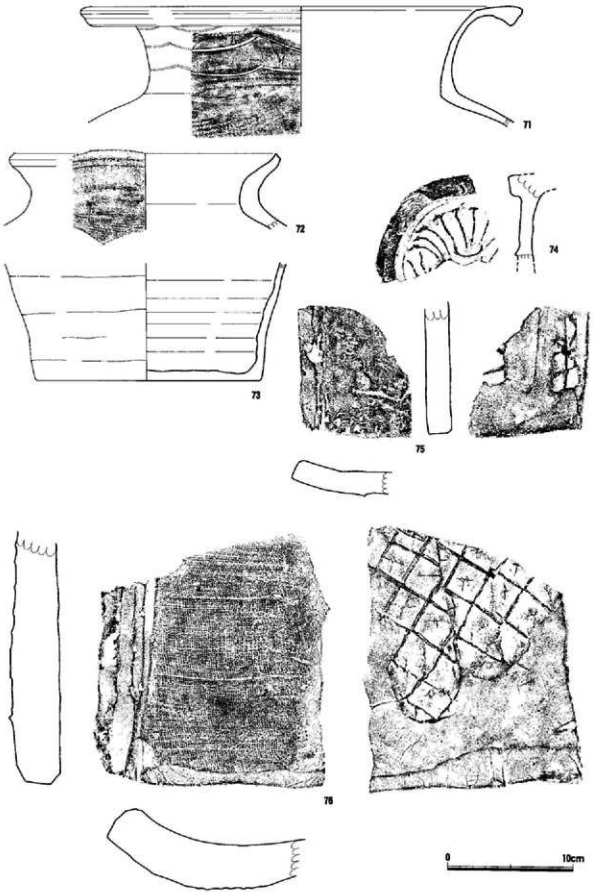


Fig.8　SE－07 出土遺物実測図 3（1/3）

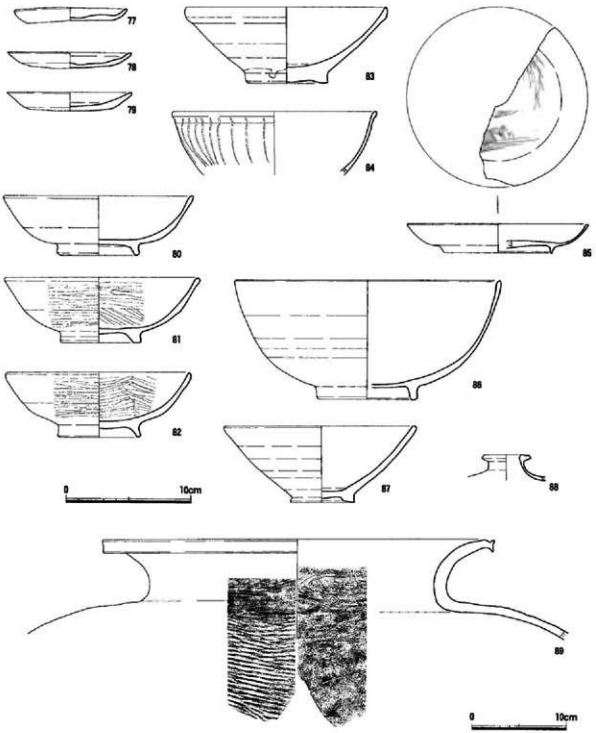


Fig.9　SE－07 出土遺物実測図 4（1/3・89 は 1/4）

第一面掘方出土の陶磁器の年代は大部分は 11 世紀後半～12 世紀前半に属し、55 など一部は 12 世紀後半まで下る。

77～89 は第 1 面井戸枠内からの遺物。77～79 は土師器皿。77 は底部糸切りで、78・79 はヘラ削り。80～82 は土師器椀。81・82 は内外面とも黒色磨研。83・84 は白磁。83 は直線的な体部に大きめの玉縁をつくる。84 は外面に縦篦描文を施文する。85 は染付の皿。薄青色で描画する。後代の混入か。86・87 は青磁。86 は大型の碗で明緑色で光沢のある釉を内外面全面に施釉する。87 は直線的な体部で、暗

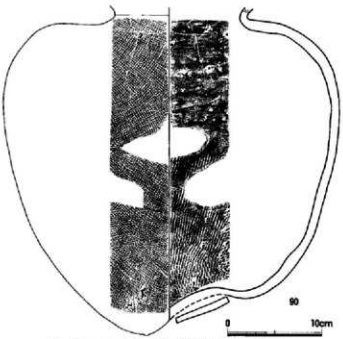


Fig.10　SE－07 出土遺物実測図 5 (1/4)

緑色の釉が畳付もふくめ全面に施釉される。高麗青磁とみられる。88 は青磁壺口縁部。89 は陶器甕。須恵質で、外面には平行タタキがみられる。内面はタタキ後ナデで仕上げる。

90 は陶器甕。須恵質で、外面は格子目タタキ、内面上半はナデ、内面下半は当て具痕が残る。底部付近に別個体の甕の破片が焼成時に癒着しており、器形全体も歪んでいる。

91～119 は下層（第２面以下）で出土した遺物。91～100 は土師器皿。全て底部は篦切り後ヘラ削りで板状痕をもつものが多い。101～110 は土師器坏。いずれも底部はヘラ削り、体部は横ナデ。104 は内面にナデの上からミガキ状の痕跡が残り、器形も他と差異がある。111 は土師器椀又は台付鉢。体部下半に指圧痕が残り、器形、調整で異質である。112・113 は黒色土器。114～117 は須恵器で、前代からの混入品。114 は坏蓋、115～117 は坏身。118 は土師器壺口縁部。口縁外面に４本の細い櫛描文が施文される。119 は器台脚部とみられる小片。外面に羽状文を施文する。

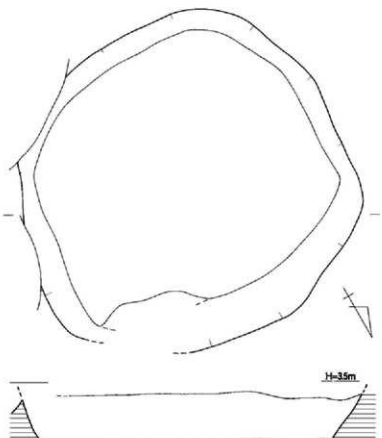


Fig.11　SE－07 遺構実測図 5 (1/60)

SE-151 (Fig.13) 調査区東側で検出された井戸状遺構とみられる遺構。遺構南側部分は SK-184 としており、位置関係から同一遺構とみる。遺構中央部分が調査範囲外にあるため井戸枠の有無は不明。全体の平面形は略方形を呈する。床面直上には炭化物が薄く堆積する。

出土遺物 (Fig.14) 120～125 は土師器皿。いずれも底部はヘラ削りで板状痕をもつ。126～128 は土師器坏。127 は底部外面に指圧痕が残る。128 は底部が焼成時に剥落したものとみられる。129 は土師器椀底部。130 は土師器坏。内外面とも細かい横ミガキが施される。131 は土師器甕。130・131 は古墳

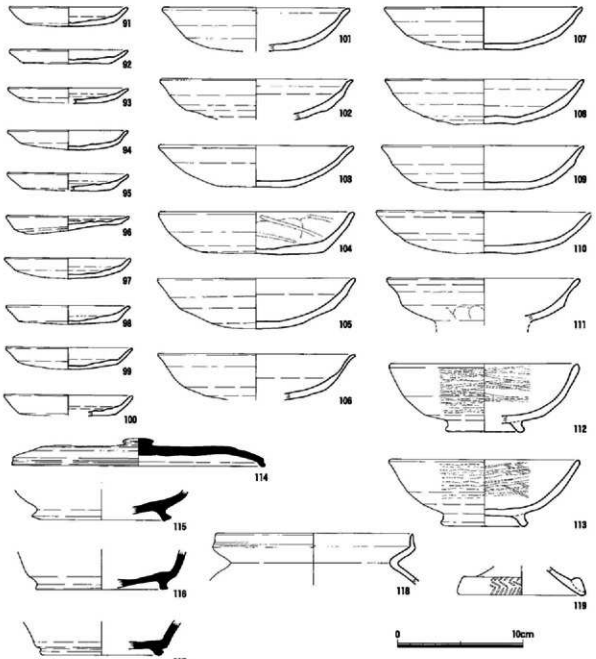


Fig.12　SE－07 出土遺物実測図 6（1/3）

時代に属する。132～140 は白磁。132 は内面に篦描き文を、134 は内面に櫛目文、外面に縦篦文を施文する。135 は内面に片彫り文と櫛目文を施文し、136 は内面に櫛目文を施文する。139 は内面見込みを一段下げる。140 は白磁皿。内面見込みに輪状の釉掻き取り部分がある。141 は青磁椀。外面は縦方向に櫛目文を施し、その上から横方向の沈線を引く。内面は櫛目文と篦描き文を施文する。142・143 は陶器壺で同一個体の可能性が高いとみられる。釉色は灰緑色で、外面上部は横ナデ、外面下部はヘラ削り、内面は横ナデ。

遺構の時期は出土遺物から 12 世紀後半頃とみられる。

SE-152（Fig.13）調査区東側で検出された井戸。検出された範囲の形状は半円形で、検出された井戸枠は遺構のほぼ中央に位置すると考えられる。断面形は擂鉢形で、遺構下部の壁面は急角度で立ち上

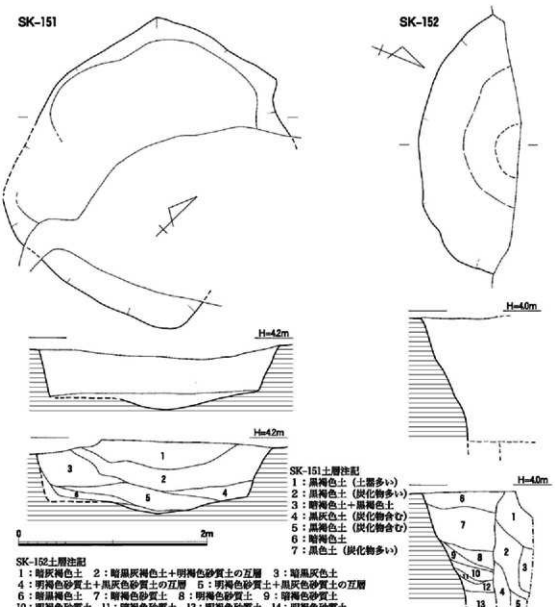


Fig.13　SE－151・152 遺構実測図（1/60）

がる。井戸枠は遺存せず、木桶を用いたと推定される。

出土遺物（Fig.15）いずれも井戸掘方からの出土。144 は土師器皿で、底部は糸切り。145 は須恵器杯で前代の遺物である。146～148・151 は白磁。146 は内面に櫛目文を施文する。147 は外面に三角文を片彫りし、体部は直に立ち上がる。148 は内面見込みに段をもつ。151 は口縁にやや厚めの玉縁をもつタイプで、内面見込み付近に砂粒が多く付着する。外面は口縁直下まで回転ヘラ削り。149 は土師器椀。外面は黒色で横方向のミガキがみられる。150 は陶器壺。釉色は暗黄緑色で、胎土中に気泡、焼け膨れなどみられる。

SE-153（Fig.16）調査区東側中央部で検出された井戸で、平面形は略円形を呈する。掘方の断面形は擂鉢形で、全体に傾斜は緩い。掘方ほぼ中央に井戸枠が検出されている。井戸枠内覆土から木片が出土しており、木枠を使用したと考えられる。井戸掘方覆土は砂質土を主としており脆く崩れやすく、井戸枠内覆土は黒色粘土を主とする。

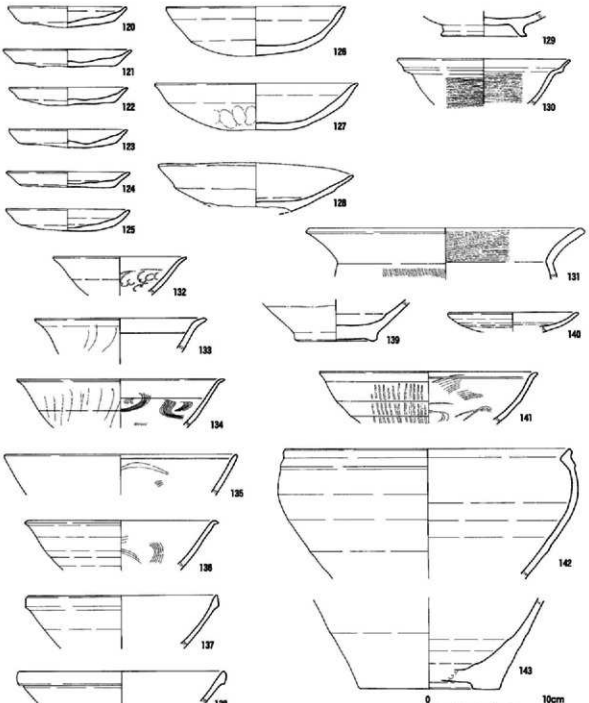


Fig.14　SE－151 出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.15）いずれも井戸掘方からの出土。152～154 は土師器皿。152・153 は底部篦切り、154 は底部糸切り。155 は土師器椀。内面は黒色でミガキをかける。156・158 は白磁。156 は内面に櫛目文を施文する。157 は瓦器椀。159 は青磁椀で、口縁端部は軽く外反する。160 は須恵器坏。

SE-159（Fig.16）調査区東側で検出された井戸で、遺構北側は調査区外に及び、掘方が SE-151・152・153 に切られるため、本来の遺構の平面形は不明。掘方の断面は擂鉢形で、壁面の傾斜は緩い。掘方の中央で井戸枠が検出されている。井戸枠は遺存しておらず、木枠を使用したとみられる。

出土遺物（Fig.17）169・172・173 は井戸枠内からの出土で、他は掘方からの出土。161・162 は土師器

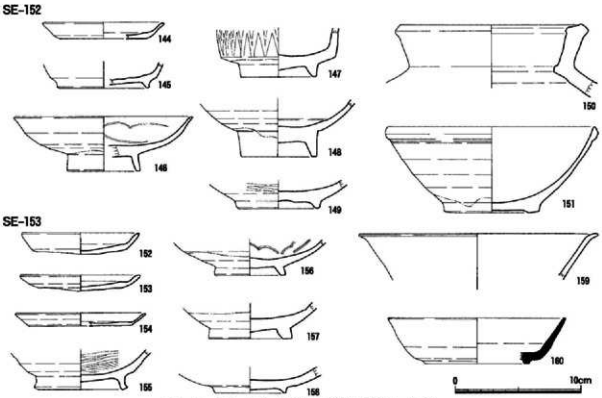


Fig.15　SE－152・153 出土遺物実測図（1/3）

皿。161 は底部糸切り、162 は底部ヘラ切り後ヘラ削り。163 は土師器椀。164～171 は白磁椀。164 は小型で、内面見込み底に段をつける。165 は内面に篦描き文を施文する。166 は底部破片で、内面見込みは輪状に釉を掻き取る。169 は浅めの体部に比較的高めの高台がつき、外面は口縁部下まで回転ヘラ削り。170 は内面に短い櫛描文が施文され、口縁上面に平坦面を作る。171 は外面に縦方向の櫛目文が施文され、内面に櫛描きの沈線が回る。172 は丸みをもつ体部に高い高台がつく。外面は全面施釉され、高台内面まで釉が回る。173 は青磁椀。釉色は明緑色で外面全面に厚く施釉され、内面見込みに櫛目文と片彫文を施文する。174 は褐釉壺。胴部外面は横ハケ目、内面はタタキ後ナデており、タタキ痕跡がわずかに残る。175 は須恵質の甕。胴部外面は横方向平行叩き目、内面はナデで、内面に指圧痕が多数残り、かなり凹凸が目立つ。

12 世紀前半から中頃に作られた井戸と考えられる。

SE-183（Fig.16）調査区南東側で検出された井戸で、北側部分は調査区外に及ぶ。掘方は楕円形で、掘方上方が西側に張り出す。掘方断面形は擂鉢形で、西側の傾斜が特に緩い。

出土遺物（Fig.18）いずれも井戸掘方からの遺物。176 は土師器皿。底部はヘラ削り。177～180 は白磁椀。181 は白磁皿で、高台は薄く、内面見込みに櫛描文を施文する。182 は青磁椀。高台は横ナデで低く仕上げ、体部は直線的に開く。内面はナデで砂目痕が残る。183 は須恵質の坏。平底で高台はなく、体部は直線的に開く。底部は回転ヘラ削り、体部外面は回転横ナデ、内面は回転横ナデ。184 は土師器丸底鉢で内外面とも回転横ナデ調整。

11 世紀後半から 12 世紀前半にかけて作られた井戸と考えられる。

SE-186（Fig.19）調査区南東側で検出された井戸。平面形は楕円形で、井戸枠は遺構東側に偏って検出される。遺構断面形は擂鉢形で、井戸枠は土層断面ではわずかに傾いて立ち上がる。

出土遺物（Fig.20）185～191 は 2 区 SE-170 の範囲で検出された遺物。185・186 は土師器皿。いずれも底部はヘラ削りで板状痕が残る。187 は白磁皿。釉色は薄緑色で厚く施釉される。内面見込みは一段

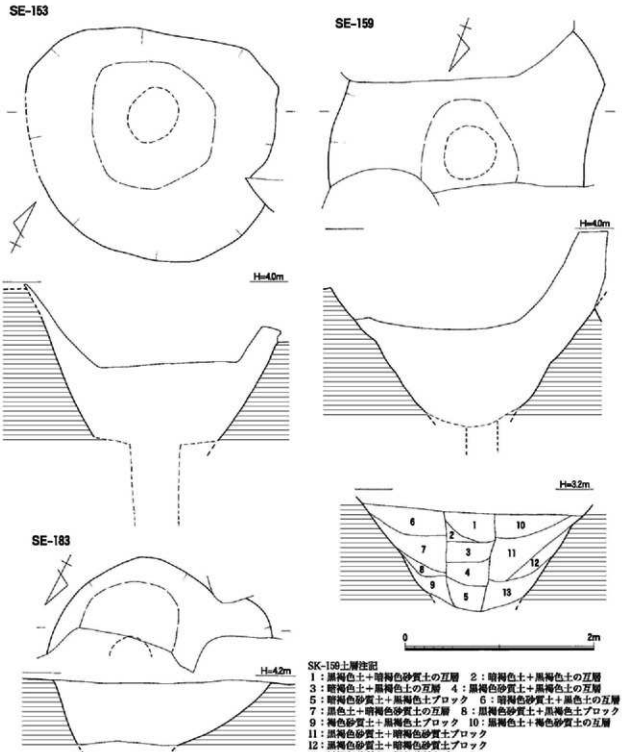


Fig.16　SE－153・159・183 遺構実測図（1/60）

下がる。188～191 は白磁碗。191 は底部で、高台が低く、皿の可能性もある。

192～199 は３区 SE-186 掘方からの出土遺物。192・193 は土師器皿。ともに底部はヘラケズリ後ナデ。194 は土師器坏。195～197 は白磁。196 は白磁皿。内面見込みに段が付く。内外面とも釉にムラがある。198・199 は褐釉壺。198 は外面上部と内面に施釉され、釉色は外面褐色、内面灰白色。199 は外面と口縁内面に施釉され、釉色は暗褐色。

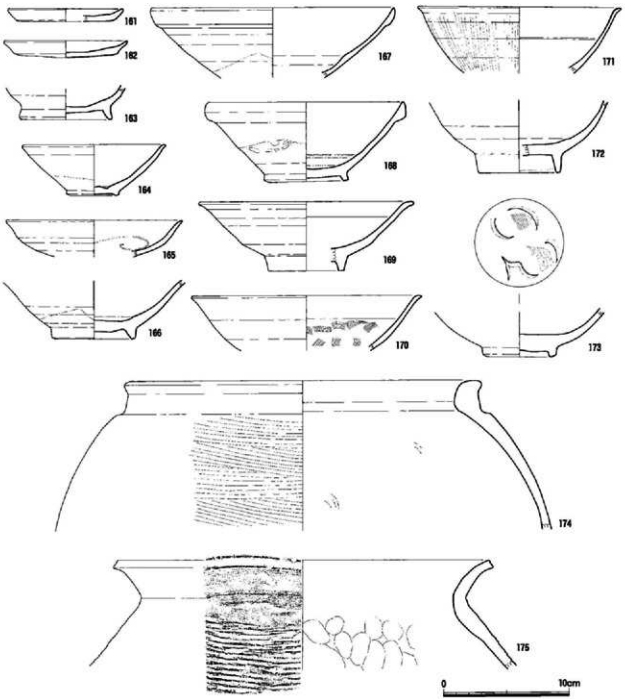


Fig.17　SE－159 出土遺物実測図（1/3）

200～211 は井戸枠内出土遺物。200～203 は土師器皿で、いずれも底部は糸切り。204・205 は土師器坏。206・207 は瓦器碗。206 は内面黒色。208 は土師器椀で外面は黒色、内面は口縁部が黒色で見込みは明褐色。内面見込み底に焼成後の刻線が入る。209～210 は白磁碗。209 は内面見込みに段をもつ。釉は灰白色で、気泡が多く入る。210 は薄緑色の釉で内面見込みの釉を輪状に掻き取る。211 は青磁碗。釉色は暗緑色で高台内面まで全面施釉。内面見込みに砂目痕がつく。

2）土坑

SK-01（Fig.21）調査区西側で検出した土坑。検出時の平面形は五角形状を呈するが、下端の形状から

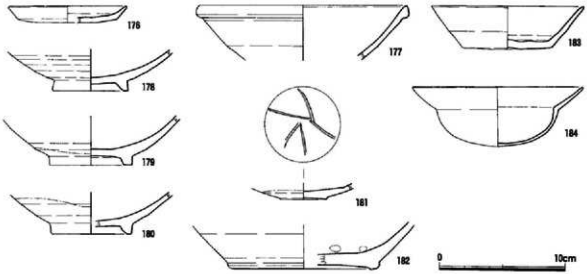


Fig.18　SE－183 出土遺物実測図（1/3）

本来は方形だった可能性もある。遺構覆土は暗褐色砂質土。断面形は擂鉢状で下端形状は楕円形を呈する。

出土遺物（Fig.22）212 は土師器蓋。213 は土師器皿。底部はヘラ切り後ヘラ削り。214～217 は土師器坏で、いずれも底部を欠くため、椀の可能性もある。いずれも外面下部はヘラ削り、外面上部は横ナデ。内面はナデ。218 は土師器椀。219 は白磁椀。口縁は薄い玉縁状の折り返しがつく。220 は白磁皿。

遺構の時期は出土遺物から 12 世紀前半とみられる。

SK-02（Fig.21）調査区西側で検出した土坑。平面形は略方形で、床面は平坦で、壁は床面から緩く立ち上がる。遺構覆土は暗褐色砂質土。壁は本来直線的にのび、方形竪穴遺構になるものと考えられる。遺物は遺構内から散漫に検出される。

出土遺物（Fig.22）221・222 は土師器皿。ともに底部は糸切り。223・224 は土師器坏。底部は糸切り、体部は内外面とも回転横ナデ。225 は白磁椀底部。高台は高く、高台側面まで釉が垂れる。

遺構の時期は 12 世紀後半以降とみられる。

SK-03（Fig.21）調査区西側端で検出された土坑で、遺構西側は調査区外にのびる。平面形は方形とみられ、遺構壁際は溝状の掘り込みがあり。板材などをはめ込んだものと考えられる。遺構中央部付近にも細かい凹凸がみられる。

出土遺物（Fig.22）226 は土師器皿で底部はヘラ削り。227 は白磁椀。口縁部は折り返して玉縁をつくる。228 は白磁椀。口縁内面は口ハゲ。釉色は薄緑色で濁りがあり、二次被熱を受けたような状況である。

SK-05（Fig.21）調査区西側で検出された土坑で、遺構北東隅を攪乱で切られる。平面形は長方形を呈し、床面は平面、壁は床面から角度をもって立ち上がる。遺構形状から土壙墓と見られるが、骨や副葬品など墓に関連する遺物は出土せず、出土遺物も全て小片である。

出土遺物（Fig.22）229～232 は土師器皿。229・232 は底部糸切り、230・231 は底部ヘラ削り後ナデ。233 は土師器椀。小型で、内外面ともに回転横ナデ調整。234 は土師器椀底部。

遺構の時期は 12 世紀後半とみられる。

SK-08（Fig.21）調査区西側で検出された小型の土坑で、北側は調査区外にのびる。平面形は楕円形を呈するとみられ、断面形は箱形で床面は平面である。遺物は床面から浮いた状態で検出されている。

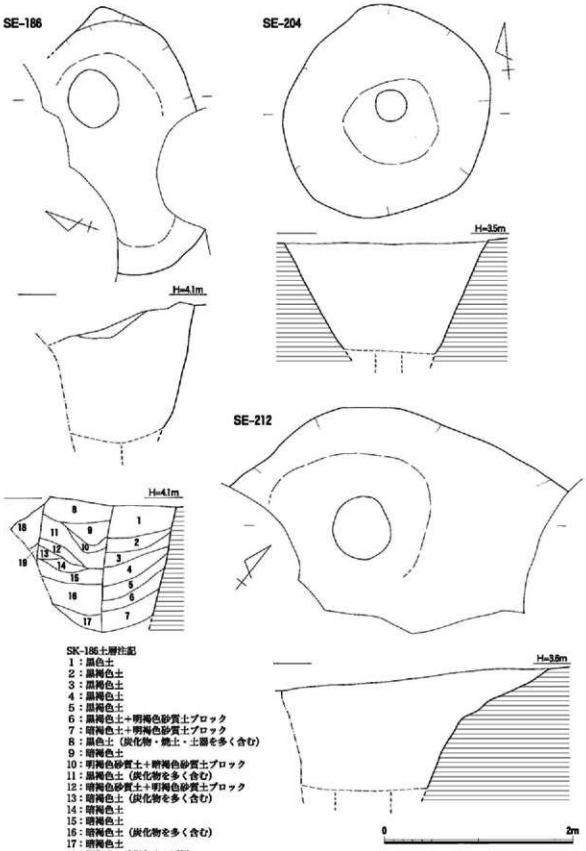


Fig.19　SE－186・204・212遺構実測図（1/60）

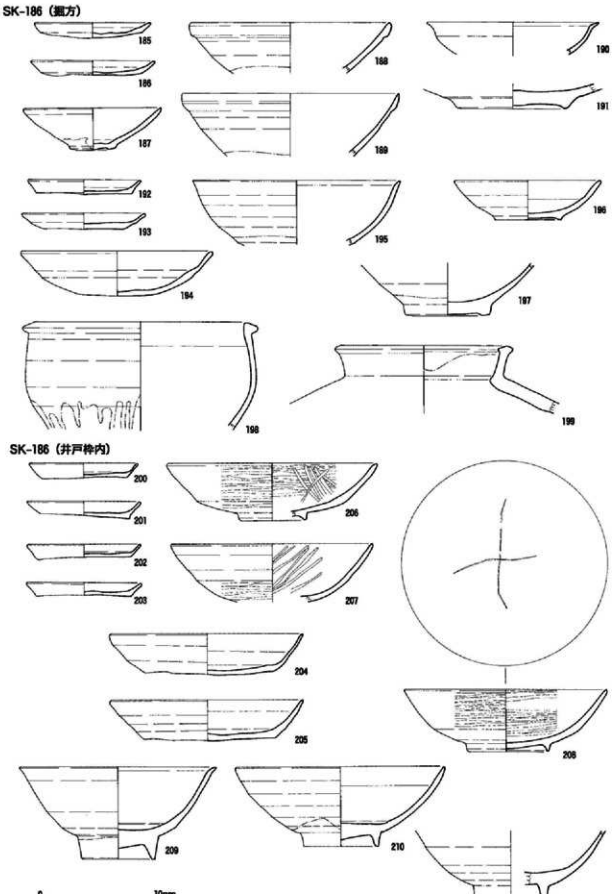


Fig.20　SE－186 出土遺物実測図（1/3）

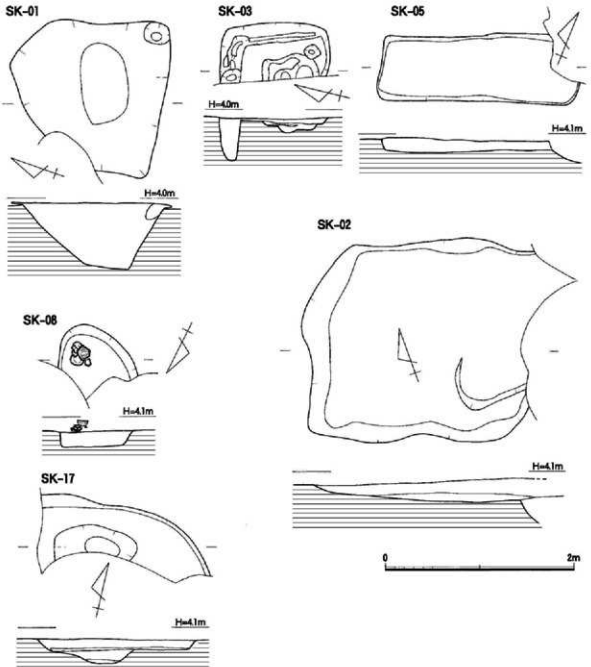


Fig.21　SK－01・02・03・05・08・17 遺構実測図（1/40）

出土遺物（Fig.23）235・236 は土師器坏。ともに底部は回転ヘラ削り後ナデ。体部は回転横ナデ。237 は陶器壺。外面は回転ヘラ削りで灰白色の釉がまばらにかかる。内面は回転横ナデ、高台は削り出し、無調整。

SK-17（Fig.21）調査区西側で検出された遺構で、遺構西側は SK-02 に切られ、南側は調査区外にのびる。検出部分の平面形は半楕円形で、盤状の遺構の中央に楕円形の掘方がある。

出土遺物（Fig.23）238 は土師器皿。底部は回転ヘラ削り後ナデ。239～241 は土師器坏。いずれも底部はヘラ削り後ナデ、内面は横ナデ。242 は土師器椀で、内外面とも黒色で横ミガキ。243 は白磁椀。244 は白磁皿とみられる。

SK-140（Fig.25）調査区西側で検出された遺構。平面形は楕円形で西側を別の遺構に切られる。床面

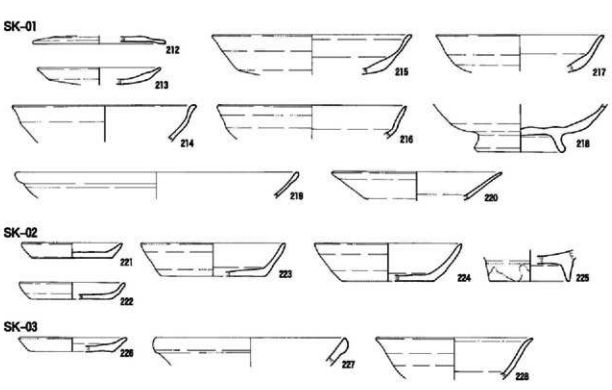


Fig.22　SK−01・02・03・05 出土遺物実測図（1/3）

は平面、壁面は角度をもって立ち上がる。

出土遺物（Fig.23）245・246 は土師器皿。245 は底部糸切り、246 は底部ヘラ削り後ナデ。247 は土師器坏。248 は白磁壺。口縁部は短く外反し、内外面の釉に二次焼成痕が見られる。249 は陶器壺。外面はケズリ、内面は横ナデで指圧痕が残る。

SK-154（Fig.25）調査区東側で検出された遺構で、遺構南側は調査区外におよぶ。遺構西側は検出できなかった。平面形は方形と想定される。床面は平面で西側がやや高くなる。遺構覆土は暗黒褐色土で、炭化物を多く含む。方形竪穴土坑の一部とみられる。

出土遺物（Fig.24）250・251 は土師器皿。ともに底部はヘラ削り。252・253 は土師器椀で、253 は内外面とも黒色。ともに内外面とも横ミガキ。254・255 は白磁碗。255 は底面に墨書があり、全体では「向」の字に見えるが、墨書の下半分が「綱」の崩し字に似ており「□綱」と読むのが適当であろう。遺構の時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半の幅で考えられる。

SK-155（Fig.25）調査区東側で検出された土坑で北側を SK-156 に切られる。ごく浅い皿状の遺構である。遺構覆土は暗褐色土で、炭化物・焼土を多く含む。

出土遺物（Fig.26）256〜259 は土師器皿。いずれも底部はヘラ削り後ナデ。260〜263 は土師器坏。264 は土師器椀。外面は横ミガキ、内面はナデで、内面は薄い黒色を呈する。265 は陶器甕底部。須恵質で、外面には自然釉が薄くかかる。内外面とも横ナデ。266〜268 は白磁碗。268 は低い高台で、高台外面まで釉がかかる。図示したものも含め SK-155 出土白磁碗破片の大半が、二次被熱を受けている。

SK-156（Fig.25）調査区東側で検出された小型の土坑。平面形は略円形に近く、床面は平面で壁面は

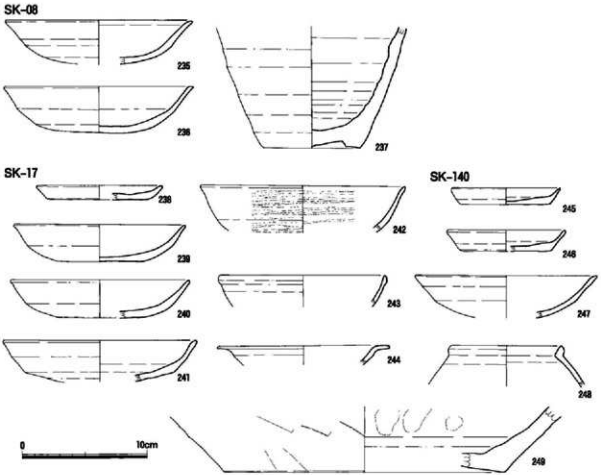


Fig.23　SK－08・17・140 出土遺物実測図（1/3）

やや角度をもって立ち上がる。覆土は暗褐色土で炭化物・焼土を多く含む。

出土遺物（Fig.26）SK-156 出土遺物は白磁碗が大多数を占め、多くが二次被熱を受ける。火災に遭った白磁の廃棄土坑の可能性が高い。図示したものは全て白磁碗。269・270 は小さな玉縁口縁で体部は丸い。外面は口縁下まで回転ヘラ削り。271 は外反した口縁に玉縁を作る。272 は外面に縦片彫文を施文する。273～276 は底部で、いずれも外面は全面施釉し、高台内面の一部まで釉がまわる。

出土白磁の時期は 11 世紀後半から 12 世紀前半にかけてのもので、遺構の時期もこれに準ずる。

SK-157（Fig.25）調査区北側で検出された遺構で、北側は調査区外におよび、さらに別の遺構に切られていて遺存状態は良くない。平面形は長方形だったとみ

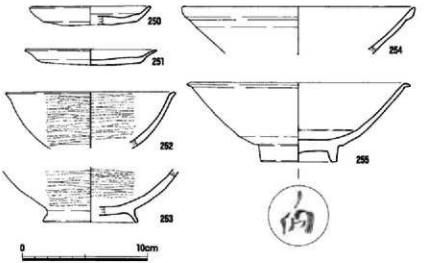


Fig.24　SK－154 出土遺物実測図（1/3）

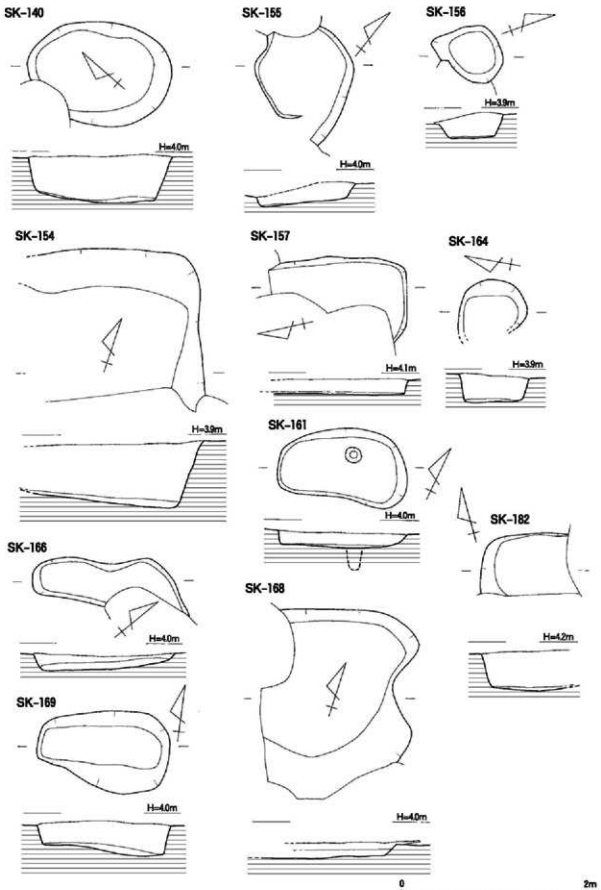


Fig.25　SK－140・154・155・156・157・161・164・166・168・169・182 遺構実測図（1/40）

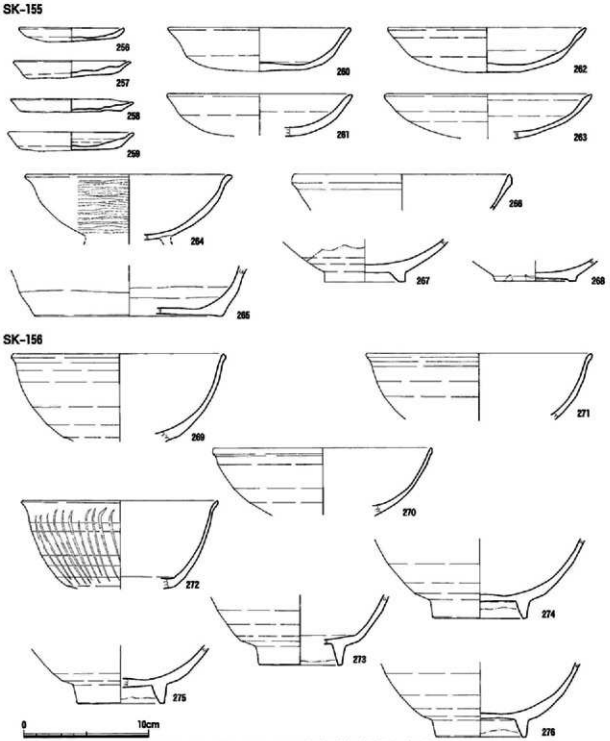


Fig.26　SK－155・156 出土遺物実測図（1/3）

られ、床面は平坦でごく浅い皿状を呈する。遺構覆土は暗黒褐色土で硬質。覆土内から遺物が小片で検出された。

出土遺物（Fig.27）277～280 は白磁碗。277 は体部が直線的に開き、内面は篦描文。釉色は淡緑色。278 は体部が直線的に開き、口縁端部に小さな玉縁をつくる。279 は体部外面に縦篦文を施す。280 は内面に沈線を 1 条巡らし、櫛目文を施す。281 は瓦器碗。外面は回転横ナデ、内面はナデ。

遺構の時期は 12 世紀前半以降とみられる。

SK-161（Fig.25）調査区西側で検出された土坑で、平面形は楕円形を呈し、断面形は箱形を呈する。

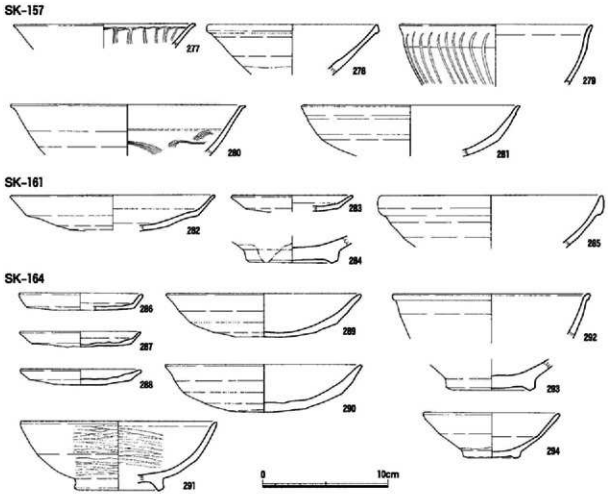


Fig.27　SK－157・161・164 出土遺物実測図（1/3）

床面は平坦で中央部にピットを１つもつ。覆土は暗黒褐色土。

出土遺物（Fig.27）282 は土師器坏。全体に浅くつくる。底部はヘラ削り、体部及び内面は横ナデ。283 は土師器皿。底部はヘラ削り。284 は白磁碗底部。釉は高台外側まで及ぶ。285 は白磁碗。

遺構の時期は 11 世紀後半～12 世紀前半とみられる。

SK-164（Fig.25）調査区中央で検出した遺構で、西側部分は検出不能。平面形は略円形で、断面は箱形を呈する。床面は平坦で、壁は直に立ち上がる。

出土遺物（Fig.27）286～288 は土師器皿。いずれも底部はヘラ削り。289・290 は土師器坏。底部はヘラ削り後ナデ、外面上部は横ナデ。291 は土師器椀で、内外面ともに黒色で横ミガキを施す。292～294 は白磁碗。292 は小さな玉縁口縁をもち、外面は口縁直下まで回転ヘラ削り。293 は底部で外面は無釉。294 は小型の碗で内面見込みに段をもち、二次被熱により一部釉が溶解する。

遺構の時期は 11 世紀後半～12 世紀前半とみられる。

SK-166（Fig.25）調査区中央で検出された遺構で、SK-169 に切られる。平面形は長楕円形で、床面はわずかに西側に傾斜し、壁は緩く立ち上がる。

出土遺物（Fig.28）295・296 は土師器皿。ともに底部はヘラ削り後ナデ。297 は土師器坏。

SK-168（Fig.25）調査区東側で検出された遺構で、遺構西側は SK-154 に切られる。平面形は方形に近い不整形で、断面はごく浅い皿状を呈する。方形竪穴土坑と見られる。

出土遺物（Fig.28）298～300 は白磁碗。298・299 は玉縁口縁で、体部は直線的に延び、298 は内面見

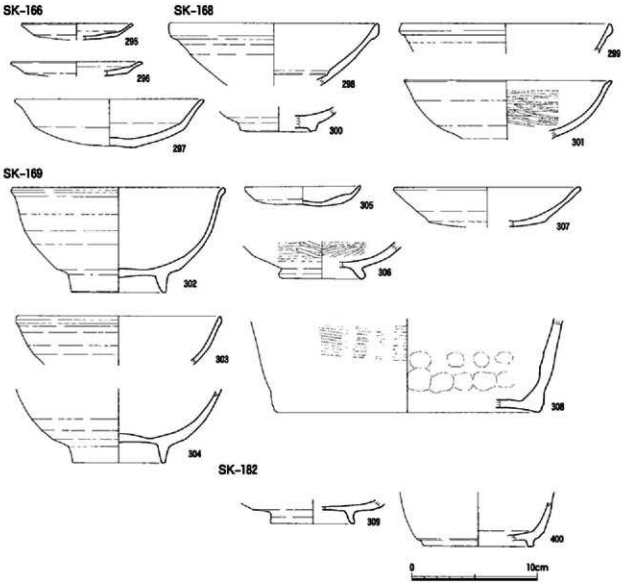


Fig.28　SK－166・168・169・182 出土遺物実測図（1/3）

込みに段をもつ。301 は土師器椀で、内面は黒色磨研、外面は横ナデ。

遺構の時期は 11 世紀後半～12 世紀前半とみられる。

SK-169 (Fig.25) 調査区中央で検出された遺構。平面形は隅丸長方形で、床面は平坦、壁は角度をもって立ち上がる。

出土遺物（Fig.28）302～304 は白磁碗。302・303 は小さな玉縁口縁で体部は丸い。305 は土師器皿。底部はヘラ削り後ナデ。306 は土師器椀で内外面とも黒色で横ミガキを施す。307 は土師器坏。308 は陶器鉢の底部とみられる。外面は横ハケ、内面はナデで指圧痕が残る。

SK-182 (Fig.25) 調査区南東隅で検出された遺構。遺構南側、東側は調査区外になり、詳細は不明だが、本来は方形の土坑になると考えられる。断面は箱形で床面は平坦、壁は直に立ち上がる。

出土遺物（Fig.28）309 は土師器椀で、内面は黒色磨研。310 は須恵器坏底部とみられる。赤焼けで、内外面ともナデ調整。

（2）第２面

1）井戸

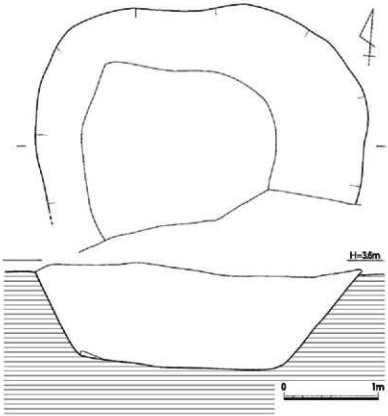


Fig.29　SK－172 遺構実測図（1/40）

SE-204 (Fig.19) 調査区西側で検出した井戸。平面形は円形で、掘方断面は擂鉢状を呈する。ほぼ中央部に井戸枠が位置する。井戸枠の直径は 40 cm 程度で、他の井戸より小型である。井戸枠材は遺存せず、木枠を使用したと考えられる。覆土は井戸枠内は黒褐色砂質土、掘方は暗褐色砂質土と黒褐色砂質土の互層。

出土遺物 (Fig.30) いずれも掘方からの出土。他の井戸と比べて遺物量は少ない。311 は土師器皿。底部はヘラ削り後ナデ。312 は土師器椀。内面に横ミガキを施す。313 は須恵器坏。314 は白磁碗で、口縁が外反する。上層からの混入とみられる。

遺構の時期は 10 世紀頃とみられる。

SE-212 (Fig.19) 調査区中央で検出した井戸で、西側は SK-172 に切られ、南側は調査区外に及ぶ。平面形は楕円形を呈するとみられ、断面形は擂鉢形で、北側上端付近は遺構壁面の傾斜が緩く、下層ほど急になる。井戸枠は遺構全体のほぼ中央に位置する。井戸枠材は検出されず、木枠だったとみられる。出土遺物 (Fig.30) いずれも掘方からの出土。315 は土師器皿。底部はヘラ削り後ナデ。316 は土師器坏。317 は白磁碗底部で釉色は灰白色。318 は白磁壺。口縁端部は強く外反する。319・320 は青磁碗底部。319 は外面に縦篦文が施文される。釉は薄青緑色で厚い。320 は釉は緑色透明で相当厚い。321 は平瓦で、内面には布目痕がのこり、外面には縄目タタキ痕が残る。

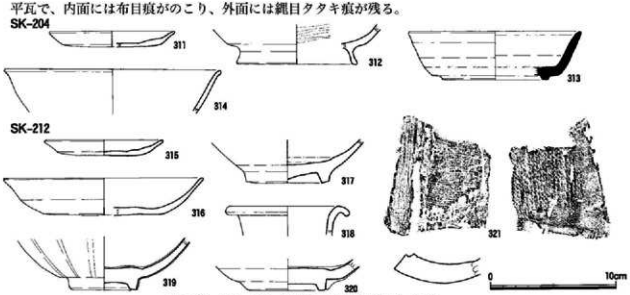


Fig.30　SK－204・212 出土遺物実測図（1/3）

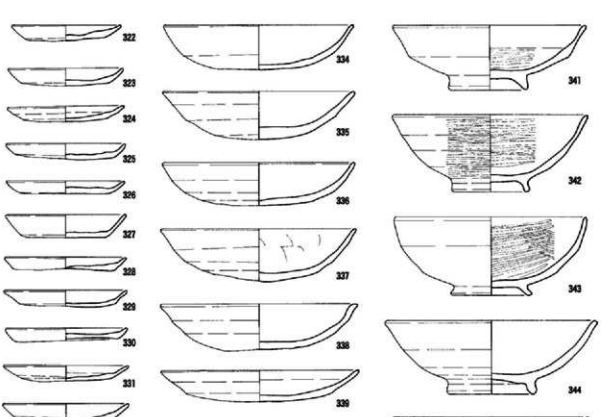


Fig.31　SK－172 出土遺物実測図１（1/3）

出土遺物からみて、上層で検出できなかった遺構である可能性が高い。13 世紀頃の井戸と考えたい。

２）土坑

SK-172（Fig.29）調査区東側で検出された大型の遺構で、南側は調査区外に及ぶ。平面形は略方形を呈すると考えられ、床面は平坦で壁はやや緩く立ち上がる。覆土は暗褐色砂質土で、方形竪穴土坑と考えられる。

出土遺物（Fig.31・32）322～333 は土師器皿。いずれも底部はヘラ削り後ナデており、板状痕のあるものが多い。334～339 は土師器坏。いずれも底部はヘラ削り後ナデ、外面上部は横ナデで、内面はナデ、337 は内面にケズリ痕が残る。340～345 は土師器坏。340～344 は内面黒色、345 は内外面とも黒色で、内面のみまたは内外面に横ミガキを施す。

346～356 は白磁。346～349 は玉縁状の口縁をもち、体部は直線的に開く。350 は小さな玉縁口縁で体部は丸みをもつ。351 は口縁が外反する。352 は底部で底部は厚く、短い高台で、内面見込みは一段深くなる。353・354 は直線的な体部で、354 は高台が低く、内面に段をもつ。355 は外面に縦片彫文を施文する。357～359 は陶器甕底部。357 は外面ヘラ削り、内面横ナデで内面に砂目が付着し、釉色は緑色で内外面とも施釉する。358 は内外面とも横ナデで釉は浅緑色。359 は暗緑色の釉を施す。360 は弥生土器。甕形土器で底部が厚くやや上げ底である。弥生時代中期初頭の土器である。

SK-203（Fig.33）調査区西側で検出された土壙墓で、遺構北側は調査区外に及ぶ。平面形は長方形を呈すると見られ、床面はほぼ平坦で遺構東側部分が一段下がる。遺構東側部分に須恵器甕を半截して

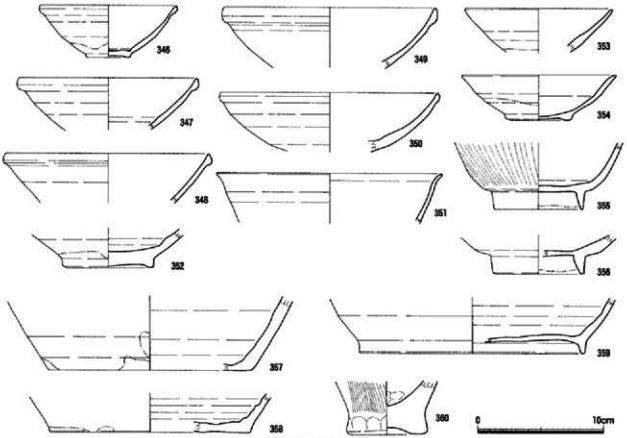


Fig.32　SK－172 出土遺物実測図 2（1/3）

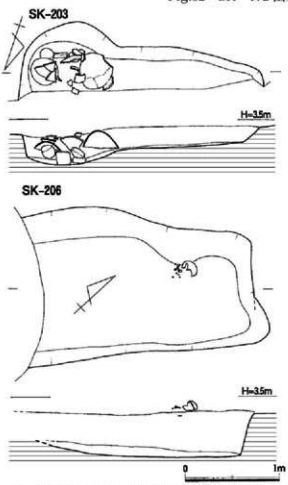


Fig.33　SK－203・206 遺構実測図（1/40）

伏せてあり、その下から配石も確認された。甕の下から成人の歯が検出されており、土壙墓と判断した。

出土遺物（Fig.34・35）361 は半裁して伏せてあった須恵器甕で、完形に復元できた。外面は平行タタキの上から横方向カキ目。内面は同心円文で、内面下部は別の当て具痕が残る。362 は須恵器坏。受け部は内傾して立ち上がり、底部は回転ヘラ削り、体部外面と内面は回転横ナデ。

遺構の時期は 6 世紀末から 7 世紀初頭とみられる。

SK-206（Fig.33）調査区西側で検出した土壙墓で、遺構西側を SE-204 に切られる。平面形は略長方形で、遺構内から成人の頭骨と歯が検出される。人骨遺存状況はきわめて悪く、頭骨は痕跡のみ遺存している状態で、歯は頭骨の横に沿って散布していた。頭骨と歯の位置関係は原位置に近いものと考えられる。人骨の出土レベルが土坑床面からかなり浮いた状態で検出されており、土坑掘方は本来の土壙墓より掘りすぎた可能性もある。

出土遺物（Fig.35）363・364 は土師器小型丸底鉢。

363は扁平な体部をもち、頸部は大きく開く。364は球形で小型の胴部に長く延びる頸部をもつ。いずれも内外面とも細かい横ミガキ。365は土師器甕。外面は横ナデ、胴部内面はケズリ、頸部内面は横ナデ。366は土師器蓋。上端部、下端部とも丸みをもち、内外面とも丁寧なナデで仕上げる。

図示できた遺物はいずれも下層の古墳時代初頭の遺物であり、SK-206自体の年代を示す遺物はない。SK-206の年代は隣接するSK-203と関連させて考えたい。

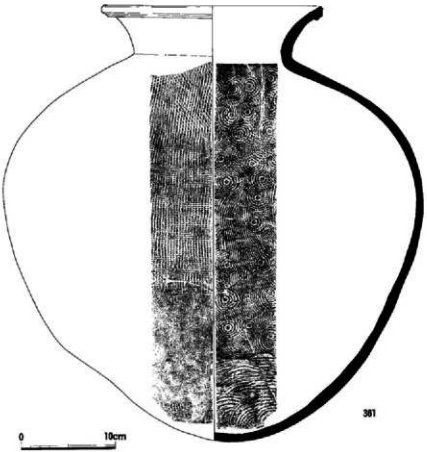


Fig.34　SK－203・206出土遺物実測図1（1/4）

（3）第3面

2）溝状遺構

SK-213 (Fig.4) 調査区西側から中央部にかけて検出された遺構。東側部分は上層の遺構により削られており、遺構南側も調査区外に拡がっているため、溝と断定できないが、調査区壁面の土層観察などから溝の可能性が高いと判断した。

遺構断面は台形を呈し、床面付近は平坦に近く、遺構壁面はかなり傾斜があって人が上るのも困難な程度である。遺構覆土は暗褐色砂質土で脆く、自然堆積の状況に近い。また遺構壁面も地山土である明褐色風成砂層できわめて崩れやすい。

北側の遺構壁面の方向は、調査区西側では南西から北東方向に延びているが、調査区中央部で向きを東に緩く曲げている。調査区中央部付近が上層の遺構で遺存状況が悪く、屈曲部分自体は遺存していない。このため溝の形状、方向について推定し、溝の性格、機能について論じることは困難である。

出土遺物 (Fig.36～38) 367～370は壺口縁部。367は比較的厚い口縁部が直立する。内外面とも回転横

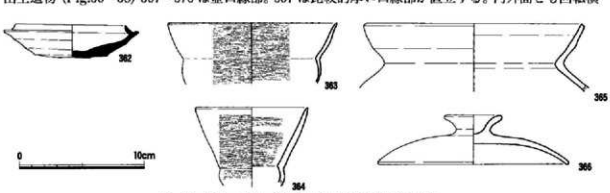


Fig.35　SK－203・206出土遺物実測図2（1/3）

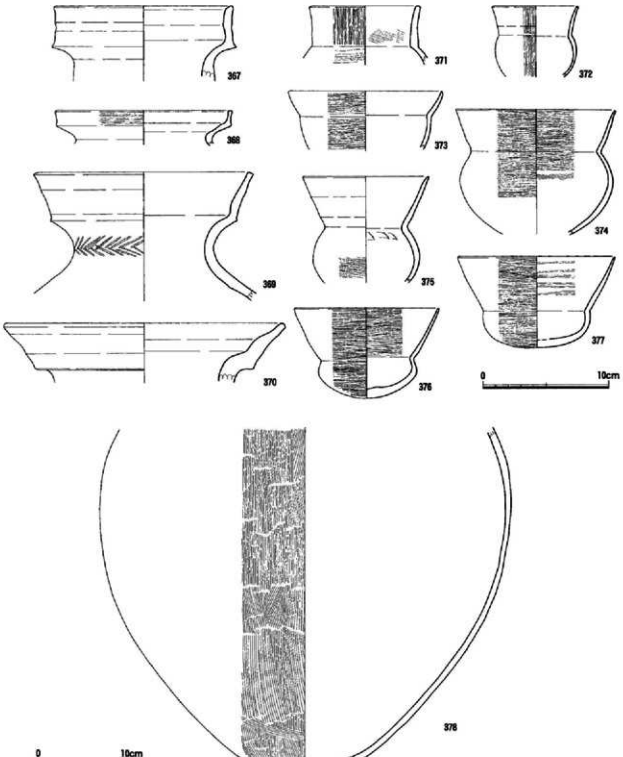


Fig.36　SK－213 出土遺物実測図 1（1/3・378 は 1/4）

ナデ。368 は口縁部が短く直立し、外面に横方向ハケ目を施す。369 は口縁部が開きながら立ち上がり、頸部に羽状文を施文する。370 は頸部が大きく開き、全体につくりが厚い。371～377 は丸底鉢。371 は口縁部が直立し、全体に器壁が厚い。頸部外面は縦方向ミガキ、胴部外面は横ミガキ。372 は小型で口縁部はやや外側に開く。外面は縦ミガキ。373 は扁平な胴部に内反しながら開く口縁をもつ。外面は細

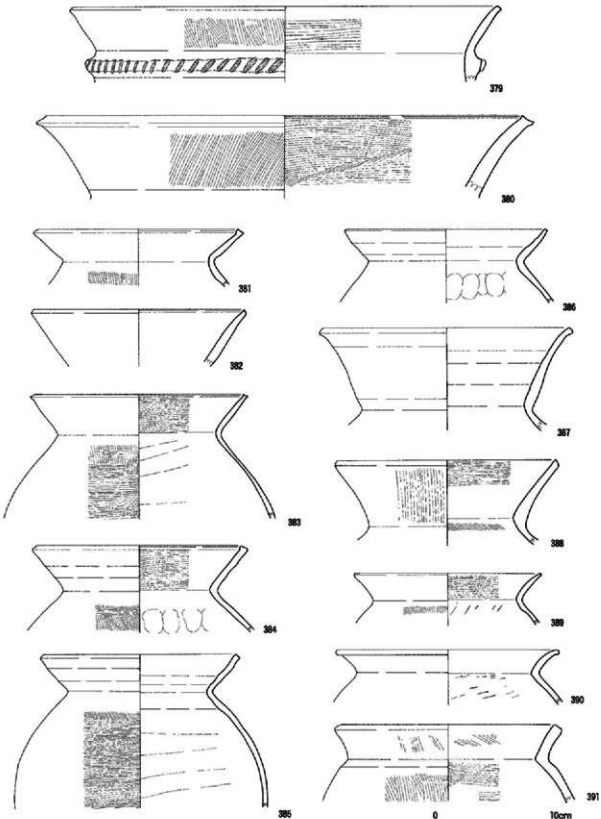


Fig.37　SK－213 出土遺物実測図２（1/3）

かい横ミガキ。374 は球形の胴部で口縁部は直口して開く。胴部に横ミガキ痕が残る。375 は外面から口縁内面にかけて横ミガキを施す。376・377 は扁平の胴部に大きく開く口縁部をもつ。外面から口縁

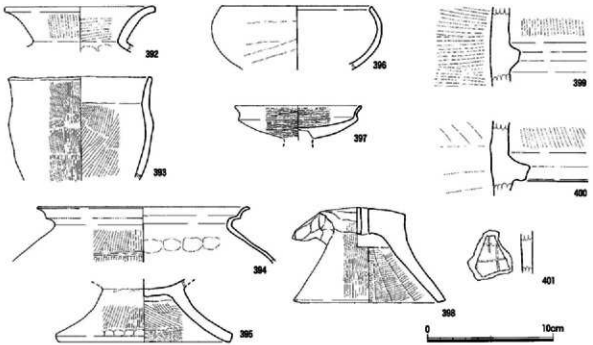


Fig.38　SK－213 出土遺物実測図3（1/3）

内面にかけて横ミガキを施す。378 は大型の甕あるいはは壺の胴部。最大径は胴部やや上に位置し、外面は縦方向ハケ、内面はケズリ。胎土では 380 に近い。

379～391 は甕。379 は頸部と胴部の境界に刻目突帯をもつ。380 は口縁部が大きく開き、器壁も厚い。381～384 は口縁端部内面をつまみ上げるもの。外面は縦ハケ後横ハケ、口縁内面は横ハケのものが多い。385 は球形の胴部をもち、口縁はやや内反しながら外側に開く。胴部は縦ハケ後横ハケ、口縁内面は横ナデ、胴部内面は横方向ケズリ。386 も口縁はやや内反しながら外側に開く。内外面とも横ナデで、内面下端はケズリ痕がわずかに残る。387 は口縁部が長く外反する。頸部は口縁に比べ細く締まった感じがある。388～391 は口縁が外反しながら外側に開くもの。388 は器壁が厚く、端部の面取も鈍角につける。389 は端部が丸まる。口縁内面は横ハケ、体部内面はケズリ、体部外面は縦ハケ。390 は口縁端部を丸める。体部内面はケズリ、他はナデ・横ナデ。391 は器壁が厚く、他と様相を異にする。外面は縦ハケ、内面は横ハケ。

392・393 は小型甕。393 は全体にだれた形になる。394 は短く外反する二重口縁をもつ。395 は台付甕または鉢の台部とみられる。内外面ともハケ調整で端部は横ナデで面取する。396 は鉢。内外面とも丹塗りで、外面はケズリ、内面はナデ。397 は小型器台坏部。受け部は短く外反する。胎土は精緻で内外面とも細かい横ミガキを施す。398 は器台。頂部に穿孔がある。399・400 は円筒埴輪で、外面は丹塗り。399 は外面は縦ハケ、内面は横ハケで、タガ部分は横ナデ。400 は外面縦ハケ、内面ケズリ。401 は表面に丹塗り後、格子目状の沈線を施文する。

（4）鉄製品・銅銭

1）鉄製品（Fig.39）

各遺構で出土した鉄製品をここでまとめて報告する。402～407 は SD-213 出土の、古墳時代前期に属する鉄器。402 は袋状鉄斧。基部に対して刃部がやや短く、研ぎ減りによるものとみられる。403～406 は鉄族とみられる。406 は根元が折れ曲がっている。407 は返りが片方にのみ認められ、銛とみられる。

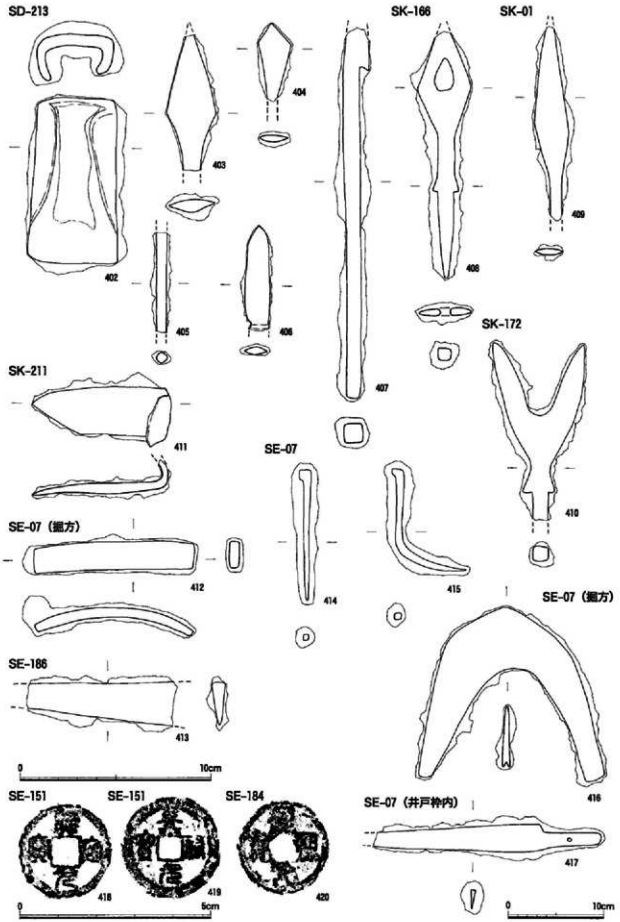


Fig.39　鉄器・銅銭実測図（1/2・418～420 は 1/1・416～417 は 1/4）

408～417は中世の遺構からの出土。408は鉄族で先端部に透かしがある。409はSK-01出土の鉄族。先端は柳葉形を呈する。410は雁股鏃。411は刀切先部とみられ、途中で折れ曲がっている。412は鉄板状製品で用途不明。416はSE-07井戸枠内出土の腰刀。417はSE-07第2面掘方出土の鉄製鋤先。

2）銅銭（Fig.39）

418・419はSE-151出土で、418は「熙寧元寶」、419は「景祐元寶」、420はSE-151出土で「開元通寶」である。他にSE-06、SE-07、SK-221、攪乱内からそれぞれ判読できない銅銭が1点ずつ出土している。他の博多遺跡群の調査に比べて貨幣の出土量は格段に少ない。

第3章　小結

（1）博多遺跡群南西端における様相

今回の調査地点は博多遺跡群のなかでも南西隅に位置し、旧地形では西隣に那珂川が迫っている。この地点は従来から水際状の地形として想定されることが多く、濃密な遺構の分布は想定されていなかった。しかし今回の調査結果は、この地区でも博多遺跡群の他の地区と同様に11～13世紀にかけて濃密な遺構が分布していることを示した。

検出された遺構の種別でみると、井戸が集中していることが注目される。とくに調査区東側では井戸の掘方が切り合って掘削されている。また井戸掘方が切り合って重複している一方、井戸枠を別の井戸の掘方が切っている例がないことから、これらの井戸群は当時平行して存在していた、あるいは非常に近接した時期に存在していた可能性が高い。

また、各包含層には弥生時代～古墳時代の遺物が多数含まれており、今回の調査地点の西側の砂丘上にこの時期の遺跡がひろがっていたものを、その後造成土として大規模に砂丘西側に押し出した結果と考えることができる。

（2）SD-213と古墳時代初頭の土器群

SD-213は遺構の規模が大きく、調査区外まで遺構が広がるために遺構全体の形状をつかむことができなかった。そのために現時点でSD-213の性格や機能について確定させることは困難である。以下では、限られた材料であるがSD-213についての問題点を述べる。

SD-213が溝であるか、反対側に立ち上がりをもたない段落ちであるかは、今回の調査範囲では確定できなかった。SD-213が溝であると仮定した場合、溝幅が広いこと、埋没時期が古墳時代前期であること、などを考慮すると、溝の機能として古墳や居館に関連した溝などが考えられる。さらに調査区内から埴輪破片が数点出土しているが、近隣の既知の古墳は今回の調査区から500m離れている博多1号墳だけであり、そこから流入してきたとは考えにくい。これらの埴輪破片については今回の調査地点付近に未知の古墳があり、そこから流入してきたものと考えたい。SD-213についても、その古墳の造成に関連する遺構と推定することができる。

SD-213および上層の遺構から出土した古墳初頭の土器群のうち、368やSE-07出土の118は口縁形状から吉備系土器とみられる。古墳時代初頭に吉備系土器の搬入がみられる例は比恵遺跡群や多々良込田遺跡などにみられ、博多遺跡群でも同じ様相であったと考えられる。

SD-213の埋没後につくられたSK-203は6世紀末から7世紀頃とみられ、SK-203の時期には溝の埋没が進み、周囲はほぼ平坦な状況に戻っていたと推定される。

（1）1区（調査区西側）第1面（東から）

（2）1区第2面（東から）

図版 2

（1）2区（調査区東側）第1面（東から）

（2）2区第2面（東から）

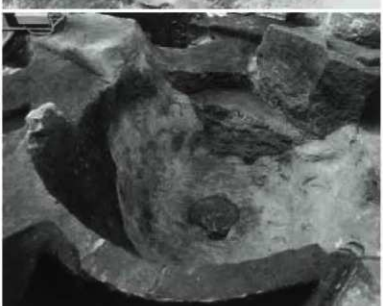
（1）3 区第 1 面（北から）

（2）SK-07 井戸枠内遺物出土状況（南から）

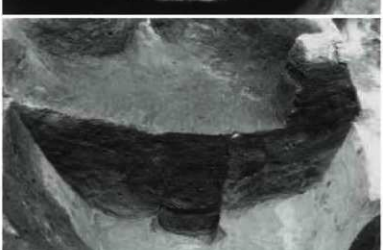
（3）SK-07 下層（北西から）

図版 4

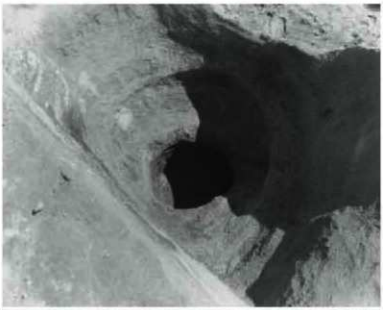
（1）SE-151（南から）



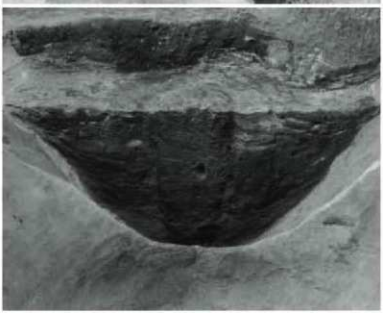
（2）SE-153（南から）



（3）SE-153 土層断面（南から）



(1) SE-159 (西から)



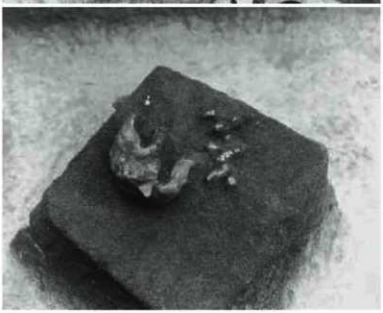
(2) SE-171 土層断面 (南から)

(3) SK-204 (南から)

図版 6

（1）SE-212（南から）

（2）SK-207（北から）



（3）SK-207 人骨出土状況（北から）

（1）SK-203（東から）

（2）SK-203 下部（西から）

（3）SD-213（東から）

図版 8

11

66

67

74

76

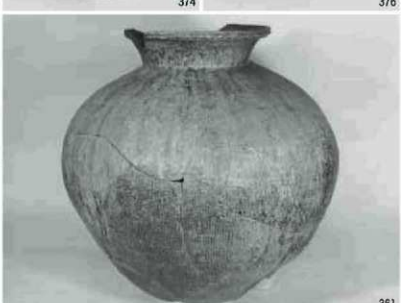
86

374

376

87

255


361

報告書抄録

ふりがな	はかた102
書名	博多102
副書名	博多遺跡群第142次調査の概要
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第848集
編著者名	大塚紀宜
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神１丁目８－１
発行年月日	平成17年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北東	東経	調査期間	調査面積
はかたいせきぐん 博多遺跡群	ふくおかしはかたく 福岡市博多区 ぎおんまち 祇園町583-4	40132	020121	33°35′14″	130°35′14″	2004.7.28 ～2004.10.24	163.4㎡

調査原因	遺跡種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
共同住宅建築	集落	古墳時代・中世	ピット、土坑・土壙墓、井戸、溝状遺構	土師器・須恵器・陶磁器・人骨・鉄器・銅銭	

博多102

2005年（平成17年）3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号

印刷　赤坂印刷株式会社
福岡市中央区長浜２丁目１－30